第10回

博報教育フォーラム レポート

Hakuho Education Forum Report 2013

～日本の教育、海外の教育。違いから本質へ～

The 10th Hakuho Education Forum　2013年2月16日　日本工業倶楽部 於　主催／博報財団　後援／文部科学省

博報教育フォーラムは

優れた教育実践のエッセンスを体感できる場を提供します。

優れた教育実践には、広く他の教育現場で新たな価値を生み出すためのエッセンスが含まれています。このフォーラムは、教育の新しい潮流となりうる旬のテーマと優れた教育実践の事例を選び、様々な立場の参加者が共に考えを深めて意見交換をする場を提供することを通して、優れた教育実践を他の実践現場へ拡大・波及させることを目的としています。

第10回 博報教育フォーラムプログラム

1 事例紹介

経験に裏付けられた日本と海外の具体的な事例を紹介し、海外からの視点や比較を通じて、日本の教育現場では当たり前のように行われ、日頃気がついていない様々な実践や活動を、改めて見直していきます。世界と日本の教育における様々な視点の違いを、例をあげながら具体的に紹介します。

2 問題提起

事例紹介での個別事例を、解釈し、普遍的な整理を行いながら、次のパネルディスカッション、グループセッションに向けた問題提起をします。

3 パネルディスカッション・グループセッション

事例紹介や問題提起で提示された様々な要素を、パネルディスカッションやグループセッションの中で、整理したり、深めたりしながら、参加者一人ひとりがテーマをより主体的に考える場です。5人の登壇者によるクロス討議に会場も巻き込みながら、考えを深め、触発し関連事例の追加提示などもしていきます。

集い、語り、気づきあう。 第10回博報教育フォーラム

～日本の教育、海外の教育。違いから本質へ～

世界の教育は驚くほど多様で、各国それぞれの特色にあふれています。海外の視点から私たち日本の教育を見つめ直してみると、日頃見落としがちなよさや課題など、様々な発見や示唆に富んでいることでしょう。

10回記念の今フォーラムでは、日本と海外の教育の相違について具体的な事例に即して比較検討し、また、日本の教育のよさ･改善点などについて、ご参加の皆さまとご一緒に、より深く討議してまいります。

ここでの気づきが明日の教育の現場につながりますように。

第10回博報教育フォーラム「事例紹介」より

Case.1

日米「学校」比較に見る、日本教育の課題と展望

新富 康央　國學院大學 人間開発学部長

新富氏は1995年から一年間、アメリカ・インディアナ州に赴任する機会に恵まれた。このとき小学生と中学生（当時）の子どもを同行させたことから、教育者としてだけでなく、保護者としても、アメリカの教育現場を垣間見ることができ、そこで様々な気づきを得ることになった。

「日本の教育はエクセレント!」

行った場所はシカゴから南へ500キロ、ブルーミントンというごく平凡な町でした。学校では朝礼も時間割りもない。そんな違いに戸惑いながら子どもたちと一緒に過ごしました。

まず、どこに行っても言われたのは、「日本の教育はエクセレント！」。

例えばアメリカでは、昼休みに、子どもが先生の部屋に入ろうとすると、先生は「ノー！ 私はいま食事をしているの」と言います。また、学級便りには「質問がある場合は夜8時まで」と書いてある。

日本では、「休み時間に子どもたちが周りに集まって来る」ことを先生方は誇りにし、また子どもたちが家出をしたというと、朝まで一生懸命探します。まさに24時間体制で子どもの人格の発達の全責任を負っている。こうしたことから「日本の教育はエクセレント」と。

欧米の場合、学校は、読み・書き・算を教えるサーカス（地方巡業興行）から始まっています。知識については責任を持つけれども、人づくりはありません。この違いを認識としてまず持っていただけたらと思います。

いじめの構図

日本	アメリカ		
「仲間だから」いじめる	上級生	VS	下級生
▼			
「逃げ場がない」	チーム	VS	チーム
▼			
「全員が加害者」			

いじめ（IJIME）VS BULLYING

次は、いじめについてです。アメリカにも「BULLYING（いじめ）」ということばがありますが、これは上級生対下級生、チーム対チームというもの。最近はネットによるいじめも問題になっていますが、アメリカでは、「僕はおまえが嫌だ！」と、はっきり個人名を出すところが特徴です。

日本の場合、子どもは「いじめられた」と言うのですが、「殴られたの？」と聞くとそうではない。日本のいじめは、「からかわれる」「声を掛けると逃げて行く」「間違えると私のときだけ笑われる」— 真綿で締められるように本人は辛いわけですが、証拠がなく、指導する拠り所がないのが特徴です。殴ったりするのは最終段階ですが、そこまでの過程がアメリカとは違います。

海外で話をしていますと、日本のいじめについて、「同じチームなのになぜいじめるのか」と尋ねられる。

いじめの構造は一般的に、加害者・観衆者・傍観者・被害者

新富氏が赴任していた
インディアナ州
ブルーミントンの風景
（1995年当時）

と分けられますが、日本ではチーム全体としていじめるので、観衆者や傍観者もいじめる側であり、逃げ場がないんですね。周りからは「グループ」と見られる中でいじめが行われていくというところが特徴です。「同じチームだからいじめる」というところに問題があります。

このように、アメリカのBULLYINGとは質を異にしているということを押さえないと、日本のいじめの問題は解決しない、そのような認識を持ちました。

自己追求の結果の多様性こそが個性

3番目にお話しするのは、「個性観」の違いについて。アメリカに赴任した頃、「メイク・ア・ディファレンス（個性をつくろう）」運動というのが、全米の中学校で目標として挙げられていました。「日本人から見れば、アメリカ人は個性的過ぎると思うけど」と言うと、「それは『セルフエクスプレッション（自己表出）』、見かけの部分でしょう。自分らしく精一杯生きるという『セルフエスティーム（自尊感情）』こそが個性だ。言い換えれば、『チャレンジ、トライ、ガッティ（根性）』が私たちの言う個性」と教えられました。

確かに日本でも、結果としての多様性を認めるというのが個性尊重のもとでした。「連帯（つながり）の中で輝く自分の『よさ』に向かって、その子なりに精一杯がんばろうとする活力」が個性尊重の教育だったはずです。品行方正、学業優秀、四番でエースだけを認めるのではなく、思い切り優しいという子や、思い切り元気がいいという子がいてもいい、色々ながんばりがあっていいのです。

「連携の中で輝く自分とは何だろう」という追求の結果として出てくる「違い」であり、その「多様性」は否定するものではないということを日本の教育界に言わないと、と思います。

総学習時間を増やす授業づくり

最後に「学び」について。アメリカで、「日本は試験地獄があるから羨ましい」と言われました。実質的に受験がないために、アメリカの先生たちは、子どもたちの学習意欲につなげるために、「何でこれを教えているのか」を徹底してアピールし続けなければなりません。

例えば中学では、確率・統計を習った後に、「これが、君たちの将来どれほど役に立つと思うかレポートしなさい」という宿題が出ていました。

日本の場合は、「教師は授業で勝負する」ということばがあります。ただし、授業時間数はどうしても減ります。学習時間を増やすための授業づくりとはどうしたらいいのかを考えなければいけません。

アメリカン・スタイルでは、授業は家庭学習に向かって意欲を高めるためのものであり、「ひとつの授業でひとつの宿題」というのが基本です。

ある高校の先生は、「私の授業がうまくいったかどうかは、授業が終わった後に、何人が図書館に走り込むかなんだ」と。これが日本の先生の感覚と違うところだと思いまして、「授業時間数は減るけれども、総学習時間は増える授業づくり」— これが日本の課題といえるのではないでしょうか。（拍手）

Case.2

カナダのメディア・リテラシー教育 ～生活環境を子どもと学ぶ～

上杉 嘉見　東京学芸大学 准教授

私たちの生活環境にはメディアが溢れている。メディア・リテラシーとは、社会のなかでメディアが持つさまざまな意味を多角的に読み解く能力のこと。この能力を育てるプログラムを学校教育のなかに取り入れている国のひとつが、カナダである。

言語教科の中でメディアを学ぶ

カナダにおいてメディア・リテラシー教育が正式に始まったのは1980年代末のこと。このとき、オンタリオ州の中・高校段階の英語科でメディア・リテラシー教育を行うことが発表され、続いて小学校の言語科においても取り入れられました。英語科も言語科も日本の国語科に相当します(図表1)。

1989年に同州教育省が刊行した指導資料集(カナダ・オンタリオ州教育省編、FCT市民のテレビの会訳『メディア・リテラシー』リベルタ出版、1992年)は、メディア・リテラシー教育を行う理由として、メディアはすでに生活環境の一部になっており、社会と生徒一人ひとりの意識に対して大きな影響力を持っていることを挙げています。

そして、生徒が日常生活の中で、学校での学習より長い時間をメディア接触に費やしているというデータを示しつつ、教員には、生徒にこうした生活環境が持つ意味を理解させる責任があると強調しています。

また、同資料集では、メディアに依存して生活している私たちが、メディアのことをよく知らないという状況を問題視しています。ですからメディア・リテラシー教育の中で、生徒はまず、メディアが現実世界を構成する手法を学習します。

例えばニュース報道であれば、新聞やニュース番組などがどのように編集・販売され、それに対して読者や視聴者がどのように反応しているのかといった情報の一連の流れを学びます。そして、そのニュースが伝えるメッセージの社会的・政治的・経済的意味について考えていきます。

メディア・リテラシー教育では、このように、メディアに関するさまざまな知識とメディアの意図を読み解く方法を生徒に獲得させようとするのです。

しかしながら同資料集は、こうしたスキルを生徒に獲得させることがゴールではないと言っています。生徒は最終的には、批判的な主体性を確立しなければいけないというのです。これはメディアが伝える情報に対して一定の距離を取り、論理的に説明可能な価値判断ができるようにならなければならないという意味。それが、将来の社会参加にとって必要不可欠な能力として捉えられていることが、重要な点だと思います。

身近な広告に着目し、その妥当性を検討する

代表的な高校用教科書の一頁です。「誰が何を売り込んでいるか?」(図表2)。中央に「あなた」とあるのは学習者である高校生。この図は、生徒が日々さまざまな組織・団体から「はたらきかけ」を受けているという状況を示しています。

「はたらきかけ」とは、つまり、生徒一人ひとりの価値観や行動に影響を与えようと、組織や団体が宣伝メッセージを送っていることです。生徒はこの「はたらきかけ」に気づき、身の回りの広報宣伝

図表 1

言語教科の内容領域の比較

日本 高校学習指導要領（2009年） 国語科（国語総合）	カナダ・オンタリオ州 高校カリキュラム（2007年） 英語科
話すこと・聞くこと	オーラルコミュニケーション
読むこと	読むこと・文学
書くこと	書くこと
――――	メディア

図表 3

学校内で目にする広告の種類

- 反喫煙・飲酒・薬物キャンペーン
- 反人種差別・性差別キャンペーン
- 高等教育機関の宣伝ポスター
- 企業広告

（Duncan, et al. (1996), p.82-86 より発表者要約）

活動に目を向けることで、現代社会の中で生きていくというのは、自分をターゲットにした広報宣伝と付き合っていくことだという自覚を持つことができるのです。

続いて、「学校内でどのような広告を目にするか」のトピックですが（図表3）、ここでは生徒に、反喫煙キャンペーンのような公共広告と、一般的な商業広告とを比較する課題が与えられています。

実はこの教科書が刊行された90年代半ばから現在まで、カナダの教育界では学校での企業の宣伝活動が問題になっています。それには例えば「企業の広告・ロゴの掲示」「商品販売の独占契約（自動販売機の設置契約など）」「企業による無償教材の作成と頒布」などがあります。予算不足に苦しむ学校が、企業から資金や教材の提供を受けるのと引き替えに、その企業に校内で宣伝する機会を与えているというわけです。

教科書がこの種の広報宣伝に関して生徒に示す論点は、企業の学校への関与は低コストで豊かな教育を実現させるのか、あるいは教育内容の公正さを失わせてしまうのか、というもの。生徒には幾つかの質問が用意されています。例えば「スポンサー契約による資金の獲得を通して、どのような価値観が生徒に示されているか?」。生徒にはその価値観の妥当性を、学校の役割や性格に照らして自ら判断し、意見表明することまで求められています。

このように学校での広告に注目することで、広告が生徒自身に対して持つ意味、また社会の中で持つ意味についての理解がより深められると考えられます。

社会に関心を持つきっかけをつくる

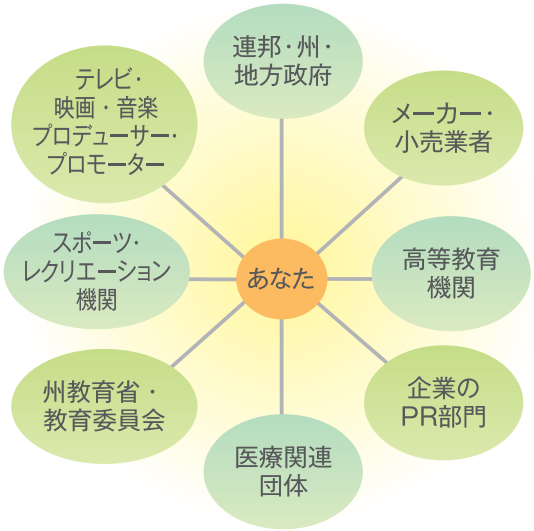
最後に、これからメディア・リテラシー教育を始めるときの留意点ですが、メディアを子どもの生活環境の一部として捉え、子どもが日々接触するあらゆるメディアを学習の対象としていく必要があります。そして、子どもが自らメディアとの日常的な関係に気づき、現実の社会を客観的に理解できるような学習を用意することが望まれます。

メディア・リテラシー教育がしていることは、結局のところ、自らが生きる社会についてよく理解させることなのだと思います。子どもが社会に関心を持ち、社会が抱える諸問題に取り組む意欲と方法を獲得していくことが期待されており、これはいわゆる市民性教育の課題とも言えます。

そして教える側にも、メディアの存在や、それが伝える情報の意図を常に意識することを習慣化するという姿勢が求められています。発表のサブタイトルの「生活環境を子どもと学ぶ」にはそんな思いを込めました。（拍手）

図表 2

教科書の中の図「誰が何を売り込んでいるのか?」



（Duncan, Barry, Janine D'Ippolito, Cam Macpherson and Carolyn Wilson, *Mass Media and Popular Culture Version 2*, Toronto: Harcourt Brace, 1996, p.83 の図に基づき発表者作成）

Case.3

ことばと思考の教育比較 ～米・仏から見た日本～

渡邉 雅子　名古屋大学大学院 教授

子どもたちは学校において、技術や知識、社会の常識だけでなく、何かについて考えたり、自分の主張を発信するための「思考表現スタイル」も知らず知らず学んでいる。

その枠組みにはお国柄があり、違いを生む鍵は国別の授業形態に見出すことができそうである。

主張を最後に表す日本の起承転結文

1980年代、多くの日本のビジネスマンが家族を連れてニューヨークに来ていました。そんな中、作文が書けず、アメリカ人教師から大変低い評価を受ける日本人小学生が急増しました。

よく似た状況がアメリカの大学や大学院でも起こっていました。英語ができる日本人留学生でも、論文になると「評価不可能」。私自身もアメリカの大学で、論文の講師から「もっと説明しなさい」とコメントされ、途方にくれた経験がありました。

ところがあるとき、その講師が、アメリカの論文の構成を黒板に書いてくれて、「原因はこれだったのだ」と衝撃を受けたのでした。

アメリカのエッセイは、「導入」でまず自分の意見・主張を述べ、それから「本体」で裏付けの事実や根拠を挙げ、「結論」で最初の主張を別のことばで繰り返します。つまり、最初の一文で言いたいことを言うのです。

しかし、日本の起承転結では、主張から遠いところから始めて、だんだん核心に触れていく。立証もされないので、アメリカ人教師は、「書き手の主張は?」と迷い、結果、「論文すら書けない」という低い評価になるのです。

このことをきっかけに、日米仏の小学生に同じ絵を見て作文を書いてもらったところ（※下図参照）、日本の作文は、「時系列」が圧倒的に多いのに対し、アメリカは、先に結果を述べ次に理由を説明する「因果律」が相当の割合で現れました。

そこで今度は、「少年はしょんぼりしています」という文章から書き始めてもらいました。

日本

なぜかというと、テレビゲームをおそくまでやって、あわてて出かけたけどバスを間違えて、野球の試合で投げられなかったからです。

アメリカ

野球の試合で投げられなかったからです。（終わり）

日本の子どももここでは理由を述べようとしていますが、構造は時系列。一方アメリカは、結果に最も寄与したと考えられる出来事のみ述べ、他の情報を切り捨てるという傾向が見られました。

フランスはどうでしょうか。

最初の課題では、フランスは日本以上に「時系列」が圧倒的に多かったのです。ところがふたつ

絵を見て書く作文　けんた君は小学生です。テレビゲームと野球をするのが大好きです。けんた君は野球チームのエースピッチャーで、毎週土曜日の朝早く野球の試合をします。下の絵はけんた君の一日の出来事を描いています。けんた君にとってその日がどんな日だったか、書いてください。

日本の作文とアメリカのエッセイの比較

作文（綴り方）		エッセイ（小論文）
❶ 起：逸話・体験から始める。		❶ **導入：主張を述べる。**
❷ 承：話題が発展する。		❷ 本体：主張を支持する事実。（通常3つ）
❸ 転：異なる視点からの驚き。		❸ 結論：主張内容の普遍化。
❹ **結：教訓と新たな疑問。**	「言いたいこと」がここで見える！	

思考表現スタイルの日米仏比較

日本　すべての部分を述べる。

アメリカ　不要な部分を切り捨て、局所的な因果関係に注目。

フランス　正反合で全体像を描こうとする努力。

目の課題では、「時系列」、「因果律」、「時系列＋因果律」に加えて、「俯瞰型」と名付けたフランスのみに現れるタイプがほぼ均等に見られました。

フランス

ピエールはしょんぼりしています。サッカーの試合に遅れて到着したことにしょんぼりしているのです。そして帰る時間には、彼は間違ったバスに乗りました。そして食事の時間におくれて家に着き、全くがっかりしてしまってビデオゲームをすることでしょう。

（※野球はフランスでは一般的ではないので、サッカーとした）

作文の授業を見ると、日本では学校の行事や共通の体験を起きた順番に語るものが圧倒的ですが、アメリカでは、エッセイで試験問題に答えるというものが多いです。またフランスでは、ことばの教育は、バカロレア（中等教育の修了試験）の弁証法の論文を書くために行われます。

さらに、これら作文の違いは、各国の「ものごとの理解の仕方」と共通していることが、例えば歴史の授業を見るとよくわかります。

日本では、歴史を理解する上で大切なのは、歴史上の人物に起こったことを自分のこととして捉える、「共感力」です。

「共感」からものごとを理解しようとするのは、歴史に限らず、あらゆる教科で見られるやり方で、状況から気持を推し量るには、何より「情報量」を必要とします。

そして「情報」が、時間の経過とともに蓄積されていく中で、原因と結果の関係が穏やかになり、ついては「起承転結」のような表現スタイルになるのです。

決断力重視のアメリカ 俯瞰で捉えるフランス

しかしながらアメリカの歴史の授業は、出来事を結果と定めて、そこから時間を遡って原因を探す作業をします。

例えば独立戦争の項では、先生は「アメリカは独立戦争に勝ちました。なぜ勝ったのでしょう。」と質問し、児童はアメリカの勝因を探して「分析」を行います。

アメリカで「分析力」が重視されるのは、児童に「決断」を求めるからです。例えば「リンカーンになったつもりで南部諸州と戦争すべきかを決断する」授業では、戦争すべきかについて、児童は「YES/NOとその理由」を答えなければなりません。

その際の作業の枠組みは、アメリカの論文の構成とよく似ています。まず結果を書き、さまざまな情報から原因を選び、残りを削ぎ落とす。「分析」は、そのために必要なのです。

一方、フランスの歴史教科書は、ひとつの出来事が見開き一頁で完結する構成です。絵画や写真など視覚イメージと5W1Hの質問で構成されていて、内容を理解した後、「フランスの歴史」という全体性の中に、その出来事を時間・空間的に位置付けます。世界の複雑性を、弁証法を使って理解しつつ、その複雑な世界を人間が整理して解釈の視点を作り上げるのが、フランスの思考表現スタイルです。

こうしてみますと、教育はバラバラに行われているのではなく、一貫性のあるひとつの閉じたシステムとして働くことがわかります。効率の面からはアメリカ型が勝るように思えてしまうけれど、そこで棄てるものの大きさを、日本とフランスの例から気づくと思います。ほかの国のいいとこ取りはできません。

だからこそ、今あるシステムの原理、それから強みと課題は何か、どう外の世界に、そしてシステムに開いていくのかということを考えるのが重要だと思われます。（拍手）

第10回博報教育フォーラム「問題提起」

外からの観察が日本の学校にもたらすもの

西原 鈴子　国際交流基金日本語国際センター 所長

3氏による事例紹介を受けて、西原氏が最初に示したのは「外からの目」が見た日本の教育についての一考だった。すでに異文化との融合が始まっている現場には、「外からの目」がその重要な助けになるという。その理由とは。そして今、現場に与えられた、課題とは。

海外教師の観察から私たちが気づくこと

「海外教師の日本の教育に関する印象」（※博報財団が実施した調査報告書：会場で配布）の中の、海外教師の観察を見てみますと、その人がどんな国から来たかによって、同じことにも感想が違うと気づきます（図表1）。

観察にはまた、二面性があります。例えば「ホームルーム」が、仲間意識の醸成によいという意見の反面で、教科ごとに子どもが教室を移動することが必要だといった意見がある。同様に、教師の献身を称えながらも、「忙し過ぎる。授業計画を立てられているのか」というようなこともおっしゃっている。

印象というのは、どこの教育文化の背景から見ているかによって、違うということです。

例えば中国の教師は「校長先生がゴミ拾いをして模範を示しているのはすばらしい」と言いますが、国によっては、校長や教頭は、別の教育を受けるシステムがあり（必ずしも現場の教師ではないので）、この感想になります。

ですから、一律に「よい」とか、「悪い」とか言うことは難しい。ところが、個々のポイントを見ていくと、例えば「小学校のクラブ活動」は、「先生が日曜日の試合にまで付いて行くから」すばらしいし、「給食」は、「国民の栄養状態の改善に深く関わっているから」すばらしいと捉えているのがわかります。つまり、具体的にどこがよいと見られているか、私たち日本の教育関係者たちは、外からの目を借りることによって気づかされる。日本の学校の誇るべき特質や改善点を、否応なしに考えさせられるということです。

図表1

海外教師の日本の教育に関する印象

●「学校の仕組み、学校の様子 雰囲気」について

〈項目ごとのコメント数〉

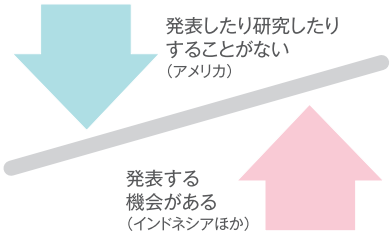
学校設備、建築構造、教育ツール	14件
ホームルーム制度	12件
生徒と教師の関係、学校の一体感	9件
挨拶や規律	7件
職員室への自由な出入り	2件
その他	4件

〈コメントの詳細〉

- ●ホームルームは一緒に食べたり掃除したり一体感が生まれる
- ●生徒と先生の関係は協力的で仲がよい
- ●学校は家族のような雰囲気
- ●職員室に生徒が自由に出入りして驚いた
- ●授業の始まりと終わりに礼をする、礼儀正しい
- ●朝礼は教師と生徒をつなぐよい機会
- ●教室は、どの学校も同じレイアウトで無機質

出典：「博報財団　日本の教育に関する印象」
・2012年12月実施
・外国語指導助手として来日中の教師21名
・来日中の日本語教師3名

●「発表・自主研究」について



●「ホームルーム」について

●「教師」について

図表 2

転入した児童生徒の戸惑い

教員室に生徒が自由に出入りできる

先生に「困ったことがあったら何でも相談してね」と言われて、びっくりした。（母国では先生は相談できる人ではなかった。）

コミュニテイの中で学校の存在が大きい

親の休暇に合わせて家族旅行をしようとしたら、大変驚かれた。（日本では学校中心に生活している。）

異文化を迎える日本の教室の課題

そしていま、「外からの目」を持つ人々の子どもたちが日本の学校にやって来ています。外国籍・帰国児童生徒、そして国際結婚配偶者の子どもたち。彼らが、日本の学校に入って来て持つ印象というのが、この調査と重なるところがあるんですね（図表2）。「外からの目」の観察結果の恩恵で、その子どもたちの戸惑いに、私たちは気づくことになります。

そういった子どもたちが、日本の学校へ入って来て、適応、不適応を左右する要因にはいくつか考えられています（図表3）。

例えば、「いつ来たか」ということ。小学校低学年で連れ出した場合は、滞在先の文化や学校にスッと馴染むが、中学生だとことばも習得しない。それはある言語で生まれて育つ子どもが、12歳ぐらいで、その言語の話者として一応の完成をみるといわれているからです。言語的には「12歳±2歳」ですが、文化的には「9歳の壁」というのがあります。

どのような仲間に入って行くかという年齢もあります。小学生は「ギャング＝一緒に遊ぶかどうか」で、中学生は「チャム＝目的を同一にするか」。中学生の方が大変だと言います。

それから、「どのように学ぶか」。民族的にも、日本は圧倒的に視覚重視。目で見て確認するというようなことですね。でも、ラテン系の文化は一般的に聴覚重視と言われています。

さらにコミュニケーション類型では、日本では、「わかり合っていることは言わない」ですが、「はっきり口に出し合う」ことで成り立っている関係もあります。

「グローバル人材」育成のために

しかしながら、日本の公教育は、対象となる児童生徒がみな日本人であることを前提としています。

例えば、ブラジルの子どもは男女ともピアスをしていますが、日本の先生が、「ブラジル人だからピアスをするのよ」と言うと、日本の子どもが「何で私はだめなのか」と言ってくるような問題があるというんですね。

異文化間教育のある専門家は、「ふたつのアイデンティティを使い分けていくことは奨励すべき」として、「違いを認め、差異を受容する力が大切」だと言っています。そして教師は、子どもに自主的な同化をさせないことを課題認識するべきだと。

そういうことを理解したうえで、「グローバル人材」として大切なのは、「文化的違いに気づくこと」「自分をコントロールすること」「状況によって判断すること」。「あの子は間違っている」と言う前に、「なぜこういうことをするのだろうか」と考え、理解した上で、つき合うことを学ぶ必要があるのではないか。それがすでに学校現場からも始まっているのではないでしょうか。（拍手）

図表 3

日本の学校への適応・不適応を左右する要因

- どこから来たか（背景とする学校文化）
- いつ来たか（年齢）　12 歳 ±2歳（言語）と 9 歳の壁（文化）　ギャングエイジか?　チャムエイジか?
- どのように学ぶか（Learning　Style）　視覚重視 VS 聴覚重視
- どのように育てられてきたか（文化的自己観）
- 暗黙の約束事としての常識（社会文化的規範）

第10回博報教育フォーラム「パネルディスカッション①」

日本の教育のよさって何だろう

コーディネーター　嶋野 道弘　文教大学大学院教育学研究科長

●嶋野　道弘
文教大学大学院教育学研究科長
2005年より文教大学教育学部心理教育課程・大学院教育学研究科教授に就任。文部科学省初等中等教育局視学官・主任視学官などを歴任。主著に『教育の精神と形』（教育報道出版社）、『これからの生活・総合』（共著東洋館出版）など多数。

●**嶋野**　はじめに会場の皆さんにお尋ねしたいと思います。お手元のYES（青）/NO（赤）パネルで、お答えをいただければと思います。

ひとつ目は、「日本人は、日本の教育への自信と誇りを失いかけているのではないか」。

―YESが8割ぐらいありますかね。ありがとうございました。

ふたつ目は、「自分は、日本の教育のよさはこれであると、自信と誇りをもって言えるものがある」。

―YES、多いですね。

そうすると、全体についてお聞きしたら「誇りを失いかけている」でしたが、個人で聞きますと、「自信を持って言えるものがある」と。日本全体の傾向とここに来ている皆さん一人ひとりの傾向にはちょっと違いがあるということも言えるのかもしれません。

＊＊＊＊

さて、きょうは前半の「事例紹介」で、興味深い話をわかりやすく聞かせていただいて、「そうか、日本もそうあるべきである」ということがたくさんありました。それはそれで非常に有意義でしたが、ふと、「では、日本の教育のよさというのは何だろう？」と。

そこで、私の中で少し曖昧になりかけてきた日本の教育のよさを、パネリストの皆さんはどのようにお考えなのか、お聞きしてみたいと思います。

世界が認める「人づくり」教育

●**新富**　少なくとも日本の教育について海外が認めている「エクレセント」とは、全人格的な人づくりに全面的に責任を持つところだと思います。

日本で全人格的教育が行われるようになったのは、日本の学校が、神社学校に起源を持つからです。明治政府は寺子屋ではなく、神社の中に学校を置きました。読み・書き・算のみならず、生き方についても踏み込んで指導しようとしたのです。日本の先生方は、神社の神職の延長としての聖職だったわけです。

現在までも、日本では、心の教育から生徒指導、特別活動を通した人間のつき合い方まで学校で指導しています。先生は24時間教師をしないといけない。

そういう意味で、私たちは、「日本ならではのよさ」をしっかり持った上で、それを認めて、改革をしていくという方向で進まなければいけないのではないかと思いました。

他国にはないきめ細やかな指導

●**上杉**　先生方が児童生徒に対して、日々、非常にきめ細かい指導を行っているということが挙げられるかと思います。こうした先生方の献身的なあり方が、長い労働時間や病気等での休職の背景にあるのも確かです

パネリスト

●新富　康央
國學院大學　人間開発学部長

●上杉　嘉見
東京学芸大学　准教授

●渡邉　雅子
名古屋大学大学院　教授

●西原　鈴子
国際交流基金日本語国際センター　所長

が、ただ、献身的に働いていらっしゃる先生方を、社会はもっと評価すべきではないでしょうか。特にメディアには、もう少し教員を温かく見守る姿勢を持ってもらいたいものです。

児童たちは共感力で自ら役割を見つける

●**渡邉**　日本の「共感力」というのが、さまざまな強みを持っていると思われます。例えば初等教育に見られる班活動ですが、日本は6人でする場合が多いんですね。アメリカとかフランスに行きますと、4人です。4人以上になると、ほかの生徒の仕事にタダ乗りする子どもが出てくるというんですね。

ところが日本の場合は、わざとタダ乗りする子ども2人分を付け加える。そして、教師が特に役割分担をしなくても、それぞれ班の中でぶつかり合いながら、ほかの子どもたちの動きを見ながら、自然に自分の役割を見つけていく。これは非常に高度な認知力、あるいは全体をどうやって統括・統制していくかという力になると思います。

それからもうひとつ、日本の「授業研究」は、いま世界中に輸出されています。先生方が学校の中で研究授業をし、他の先生方の授業を見ながら授業改善をするといったことは他の国では見られないことです。特に初等教育の場合には、学ぶ子どもが中心で、先生はアシストしていく。こんな21世紀型の、最先端の教育を、日本がすでに行っていることも強みのひとつだと思います。

世界トップの労働力を創る

●**西原**　いま世界中が認めていることは、日本の労働力の質は世界一ということです。これは、教育が全般に行き届き、格差が少なく、そしてすべての教育される者の底上げを教育者が背負って、世界一の労働の質をつくり上げているということであろうかと思います。私たちは大いに誇っていいことであろうかと思います。

●**嶋野**　「日本の教育のよさ」について整理していただきました。新富先生からは「全人教育」というキーワードを挙げていただき、上杉先生からは、きめ細かい指導をする教師のお話しでした。渡邉先生は「共感力」こそ強みである、加えて日本の授業研究も誇れると。そして西原先生からは、日本の労働力の質は世界一であることを示していただきました。

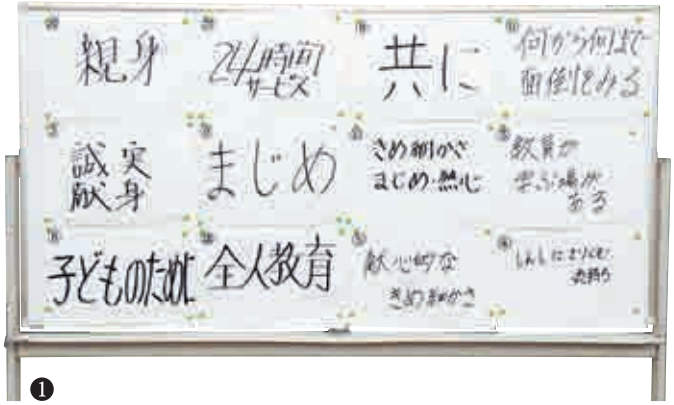
さて、これまでもずっとお話がありましたけれども、「教育のよさ」というのは、国によってずいぶん違いがあるようです。よいと思っていたことがよくなかったり、逆に、「こんなことは当たり前だ」と思っていることが、外の目を借りると高く評価されることであったりと、いろんな側面があると思います。

ただ、日本人が日本の教育のよさを知ることは、大事なことではないかというふうに思います。

さて、ここからはグループセッションに入りたいと思います。

第10回博報教育フォーラム「グループセッション」

日本の教育を表す〝キーワード〟を探る



❶

パネリストの発表を受けて、会場参加による「グループセッション」が始まった。議題は「日本の教育、日本の教師のよさを表すキーワードとは」。全国各地から集まった参加者は、21のグループに分かれて議論を交わし、およそ50分後、絞りこまれたことばの数々が、壇上に貼りだされていった。

●嶋野　ひとつのワードにまとめるというのは大変苦労なことだと思いますが、何とか出していただきました。私の独断と偏見である程度のカテゴリーにまとめて貼ってあります。

カテゴリーで見ると、ここ（❶）は非常に多いですね。おのずと日本の教育のよさの傾向というのが何となくわかりそうな気がします。

でも、こういうときに非常に興味深いのは、「のりしろ」「犠打」「こだわり」（❸）、必ずどこにも属さないものが出てくるんです（笑）。出してくれたグループに説明をしていただきましょう。

のりしろ

●19グループ　よさというと、やはり「職員室文化」というのがあるんです。それは、他の先生方が何かやっているときに、何も言わなくても、空気を感じて、スッと手伝ってくれる、手を伸ばしてくれる。

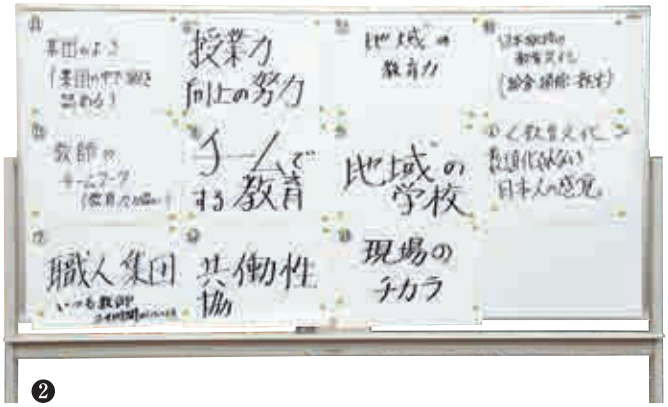
子どもたちも同じです。例えば廊下の掃除で分担を決めます。「ここからここは3年1組。こっちから3年2組だよ」と。でも線で区切らないですよね。こっちをカバーして、あっちもカバーして。そうして「のりしろ」というのが学校の中に、子どもたち、先生方の文化の中に根付いている、そういうよさがあるということです。（拍手）

犠　打

●14グループ　「犠打」というのは「送りバント」ということ。テレビコマーシャルでも、「お父さんはホームランは打たないけど、送りバントをする人が必要だ」というのがあります。

ランナーを進める送りバントのように、自分たちが身を削って子どもたちのために頑張るという教員の姿が、子どもたちの教育によい影響を与えているのではないでしょうか。しかし、「自己犠牲」ということばはあまり使いたくないと、「犠打」ということばを選ばせていただきました。（拍手）

●嶋野　いかがですか。確かに犠打がないと勝てませんよ。ホームランだけでは勝てませんよね。



❷

❸

こだわり

●12グループ　先生方はみんな協力して、互いに意見を聞きながら、一丸になってやろうとしますが、それを支えるのは、先生方一人ひとりが、「この教科はこう教えたい」とか、「この行事はこんなふうにやりたい」とか、「子どもたちにはこんなふうになってもらいたい」とか、そういう理想のようなものをちゃんと持っていること。

「これだけは譲れない、だからこのように頑張っていきたい」というのを、「こだわり」ということばで表現しました。（拍手）

●嶋野　どこにも属さない奇抜なものと思って聞いてみましたが、決して特別ではなくて、結構共感されるワードだということですね。

圧倒的に数が多いのが、ここ（❶）ですよね。日本の教育は、ひとことでいうとこういうことなのか、という感じがするわけですが、お話をしていただきましょう。

共　に

●8グループ　私たちは、東日本大震災の教訓を受けて、非常に規範意識が高いというような話から、子どもと〝共に〟学んでいく先生、そして子ども同士〝共に〟考えていく、それが教育のよさだというところで、「共に」ということばを選ばせていただきました。（拍手）

誠実・献身

●3グループ　このグループには、海外の学校で教えている方、会社経営者、それからNPOで活躍されている方がいまして、まず、海外の先生と日本の先生を比べた場合、海外の先生は4時ぐらいで帰ってしまって、アルバイトに専念するようなこともあると。

それに比べたら日本の先生は本当に24時間、誠実に、「子どもたちのために」というキーワードで何もかもやり遂げる。「誠実・献身」ということばはそういうところから生まれています。（拍手）

●嶋野　他には「職人集団」「教師のチームワーク」とか、教師についても挙がっています（❷）。

職人集団

●7グループ「職人集団」というのは、「チーム力」でやるということがひとつですが、子どもたちについて、または学習指導について、やはり譲れないこだわりを持っている。そういう思いでの集団であるということです。（拍手）

●嶋野　次のまとまりは「地域」ですね。

地域の学校

●19グループ　グループ全員が「地域」というキーワードを挙げました。地域の文化の発信地であり、「おらが学校」という意識を持って、日本の教育は行われてきた。また、コミュニティースクール等もありますので、これからも「地域」ということがキーワードになるかなというところで挙げさせていただきました。（拍手）

●嶋野　この「数値化されない日本人の感覚」はどうでしょう。

数値化されない日本人の感覚

●1グループ　グループのメンバーは、大学の先生や、教育長、日本語学校の先生、特別支援教育者など。そんなメンバーで、「教師のよさは何か」と言ったときに、日本の教育がブレないのは、「子どもたちが生きる」というところに先生方の基盤があるから、という話しになりました。

例えばPISAなどのテストでは、数値化されるものしか測れない。一方で、子どもたちが生きるための術として「こう教えたい」、というところは、なかなか数値化されないけれども、日本ではそうした感覚をどの教師もベースに持っている。だからこそ日本の教育は、表面的には変わるけれどもブレない。そこによさがあるということです。（拍手）

●嶋野　これは拍手の音がちょっと高いようですね。一時、数値化され、序列化されて、みんな自信を失いかけたりしているのに、「そんなことないよ。数値化されないところによさがあるぞ。頑張るぞー！」みたいな感じですよね。

さて、ここに「公教育」というのがありますが。

公教育

●16グループ　日本の子どもたちは、北は北海道から南は沖縄まで、どこの学校へ転校しても、同じように教育を受けることができる。どんな子どもも必ずある程度のスタンダード、標準に近づくまでは教育していくという、保障がなされている。

そういった意味で、公正で、公平な教育を日本がしているということは、一番大きなメリットであると考えました。

それに応える、24時間働く教師がいるという意味で、「公教育」ということばでまとめさせていただきました。（拍手）

●嶋野　ありがとうございました。日本の教育のよさがだいぶクローズアップされてきましたね。当然ここには課題も出てきますが、まずはよさを見てみました。

それでは、このキーワードをご覧になりながら、パネリストの先生方に、ご感想等をいただきたいと思います。

第10回博報教育フォーラム「パネルディスカッション②」

そして、新たに創造するために

現場からの声に多くの気づきを得て、日本の教育に係わるさらなるステージづくりのため、パネリストたちが今、考えることとは―。

●**嶋野**　グループセッションのおかげで、日本の教育のよさというのがクローズアップされてきました。

そこで、グローバル化する社会の中で、日本の教育のよさを十分に発揮し、しかし独善にならず、これから日本が新たに創造していくためには何をすべきなのか、話を進めていきたいと思います。

●**渡邉**　私たちは国ごとに異なる教育を受けていますが、グローバル時代、閉じていることが許されない中でどういう教育をしていったらいいのかというと、原点に帰り、「日本の教育、自分たちの実践のエッセンスとは何か」を考えることです。国語教育に例を取れば、「日本の書き方とは何か」を先生も意識して教える。その国の基本の型を修得した上で、それ以外の書き方や思考法があることを知ることが大事です。

次に世界で共通して使われている型・描写・説明文・物語等を理解した上で、各国独自の型を知る。例えばアメリカのエッセイ、フランスの弁証法を知ることで、初めて「日本の起承転結が持つロジックが何か」が理解できます。こうした教育により、「相手がどんな枠組みで話しているのか」を意識して聞くことができるようになります。

●**新富**　日本の教師の一番のよさは「専門職」。ドイツもフランスもロシアも中国も、そしてアメリカでも、教師は「政治的中立」にはおりません。日本の先生方は、比較的プロフェッショナルな視点で自分の考え方で自由に教えることができます。

その日本の教育をどうするかを考える時に、教育以前の「人間開発」の課題があります。特に中学校で顕著ですが、いま子どもたちはダメな人間だと自分に「損在」のラベルを貼ってしまっています。

その子どもたちに誰もが大切という「尊在」感を与えるために、私は「班長が居ない班づくり」さえ主張しています。一人ひとりが係を持って、場に応じて係の責任者が替わってくるという輪番。「自分は大切な存在なんだ」ということを意識させるような教育、学級づくり、全員参加の授業づくり、それをどうするのかということを考えてもらいたいと思います。

●**上杉**　抽象的な言い方になってしまいますが、子どもや先生方を含めた私たちの成長を支えていく思考や行動は何か、という問いを立てたとき、メディア・リテラシー教育の事例から得られるひとつの答えは、＜検討対象と距離を取り、それを冷静に見つめ、注意深く判断を下すこと＞といったメディア分析の方法にあるのではないかと思っています。一人ひとりがこのような実践をすることで、私たち自身はもちろん、社会も成長

していくのではないかと考えております。

●**西原**　金子みすゞの詩にあるような、「みんな違って、みんないい」ということを真に思えるように、先生が道をつくってくれるということがないと、と思います。

「みんな違って」の相手になる人たちが日本の学校に入って来て、帰国してから日本のことを話すとき、その話の内容に私たちは半分責任がある。だから、「違って」の人たちに、「私たちはこういう理由でこうしているのだ」ということを説明していくことが必要かしらと思います。

●**嶋野**　「違いに気づく」ということがクローズアップされてくる。でも、「違いに気づく」というのは「自分を知る」ことだし、「相手を知る」こと。この両方がわかってこないと、違いはわかってこないということにもなると思います。

＊＊＊＊

ここで、嶋野氏は、再び会場参加者に「YES/NO」設問を投げかけた。項目はふたつ。

「自分や自分の学校はもっと変わらなければならないと感じた」。

「自分が日々実践していることの中に、自信や誇りを持ってよいことがあることに気づいた」。

――いずれも「YES」回答が「NO」を圧倒し、会場は青色のパネルで埋め尽くされた。

●**嶋野**　では、パネリストの皆さんに戻します。日本のよさに気づきながら、新たな日本の新たな本質を探って、創造していこうということに関してひと言ずつメッセージをいただけますか。

豆腐づくりよりも納豆づくり

一粒の個性を大切に育てたい

●**新富**　私はことばを最後に残します。ひとつは、「太郎が太郎になることを応援する学級づくり」。

例えば西原先生のお話にあったピアスは、その子にとっては、趣味の問題ではなくて、生き方に関わる問題。それをみんなで認めることができるのが学級なんです。ぜひ子どもたちにそういう方向で指導してあげてください。

もうひとつ、「豆腐づくりよりも納豆づくり」。豆腐も納豆も同じ大豆ですが、豆腐は個性といいますか、大豆が潰されてしまっ

ています。でも納豆づくりでは、一粒一粒、個が生きていて、しかも互いに粘り合う。

このことばをお土産に持って帰っていただけたら、と思っております。

「知ろう」とする試みの持続

社会の状況から目を離さない

●**上杉**　きょうはパネリストや会場の先生方からたくさんのお話を伺いました。私たちは、ここまで一日かけてしてきたような、自分が知らないことを知ろうとしたり、他者を理解しようとする営みを、これからもずっと続けていく必要があるでしょう。

先生方は、日々、子どもやその保護者を理解する努力を続けていらっしゃるかと存じますが、こうした教育活動の範疇にとどまらず、社会・政治・経済の状況などに対して関心を広げ、これらの事柄を理解しようとするのをやめない姿

勢も重要だということを、頭の片隅に置いていただければうれしく思います。

新しい書き方を「創造」する

現場から発信する文章の型

●**渡邉**　先生方がここにいらっしゃってから何時間か経って、もうすでに先生方は選択肢を持っていると感じます。行き詰まったときに、「これだけが唯一の方法ではない」と理解されたと思っています。

そしていま私が必要性を感じていることは、日本の初等教育の実体験に沿ったプラグマティズムの次の、中等教育の段階で、子どもの作文と違った、もうひとつの型を教えるべきではないかということです。それはもしかしたら「なぜ?」と聞くような、意見文の形かもしれない。日本の学校で教える「文章の型」というものを、ボトム・アップで、現場の中で、考え出していただけたらと思っています。

一方で、学校の大切な機能の中には、先人の積み重ねを伝える伝統文化の継承ということもあると思います。教育実践は文化伝承そのもの。例えばタブレットで思考表現法は教えられません。それは教師を通じてのみ、しみこむように教えられるもの。創造しつつ伝統を継承する。応援しています。

外野が現場を信頼しよう

教師の献身を伝えていこう

●**西原**　先生方はすばらしい姿勢をお持ちになって、実質 24 時間勤務にもかかわらず、「ちゃんとやっているのか」というようなことが様々聞こえるような中で、お仕事をされていると思います。

この中には、教育の世界から見ると、外野の方々も大勢いらっしゃると思いますが、その外野の責任として、この先生のすばらしさを、「世間」という目に見えない日本国内の外野に対して発信していって、先生方のよいお仕事を、社会全体が確かめ合い、信頼することが必要ではないかと思うのです。

「発揮」をコンセプトに

日本の教育のよさを高めよう

●**嶋野**　ありがとうございました。

きょうはまず、少し足元のよさを見つけようじゃないかというようなコンセプトで進めてきたわけですが、当然よさの裏には課題があって、それはすでに提示されていると思います。そういう両面から考えていく機会になればと思ったわけです。

私から最後にひと言。最近、「教師力の向上」「教育力の向上」「学力の向上」と盛んに言われますけれども、この「向上」の代わりに、「発揮」というワードをコンセプトにしてみてはどうでしょうか。

本来、先生方はすばらしい力を持っている。日本の教育にはすばらしいところがある。それがなぜ「発揮」されないのか、何か阻害要因があるのではないか。その阻害要因をまず取り除くことから考えるのはどうかと思ったわけです。

＊＊＊＊

さて、博報教育フォーラムも 10 回記念。今回は、少しでも自信とか、誇りとか、そういうものを持って、明日から子どもの前に立っていただきたいと願っていたわけです。そんな思いを強く持ちながら、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

※10回開催を記念して、フォーラム修了後には懇親会が行われ、参加者たちのさらなる交流の場となった。

博報財団
HAKUHO FOUNDATION
子どもたちと、未来のあいだに

博報財団は次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の実現を目指して活動を続けています。

当財団は、株式会社博報堂が教育雑誌の広告取次業として1895年に創業以来、次代を担う児童の育成を重視して教育・文化面において行ってきた数々の支援事業の精神を引き継ぎ、1970年に財団法人博報児童教育振興会として設立されました。以来、次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の支援を目的に活動を続けています。
新公益法人制度の施行に伴い、公益財団法人として認定され、2011年4月、博報財団（正式名称：公益財団法人博報児童教育振興会）としてスタートしました。

博報賞　ー 教育現場の地道な努力を顕彰し、すぐれた実践の輪を広げます ー

博報賞は、児童・生徒に対する日頃の教育現場で尽力されている、学校・団体・教育実践者を顕彰することを通して、児童教育の現場を活性化させることを目的としています。

フォーラム参加者の声をご紹介します

●日々現場で多忙な中、考えたこともないような他国の教育の様子を知ることができ、大変勉強になった。

●自国の教育を見直すには、これからは海外に目を向けていかなくてはならないと、強く思っています。

●メディアに対する批判的思考力の大切さがわかった。日本になぜ、その教育がないのか、はがゆさを感じる。

●本校にも海外からの帰国子女が時折転入してきます。彼らの持つだろう違和感、背景が個々違っていることも明らかにしていただきました。

●グループで討論することで、自分自身についてふり返る、いい機会になりました。

●「アメリカは生徒に決断させる」というのが印象に残りました。

●教員は外の世界を知らない、知る機会も少ない、しかも知っていることもせいぜい自分の勤務校の実態程度。だからこそこのようなフォーラムに期待したい。

●自己肯定感の高まる内容でした。元気になりました。日本の教育によさがあることを実感できました。自信をもてます。

●自分たちが行っている教育について、少し違った角度から考えることができた。プログラム全体が、私たち教員を勇気づけるものとなっていて、明日からの活力をいただいたように感じています。

●世界の国々によって、日本教育の評価される部分や価値が違うのだなと、改めて感じた。また世界の視野を知ることも大切だと思った。

●職業や立場が異なる人同士で話をすることで、様々な意見に触れることができ、自分自身の見方を広げることができた。

●児童生徒の主体性、多様性を認め合う必要性を共有できた。

●数値上の学力を上げることに世間の意識が高まっている。全体の質を高めることは大切だが、子どもが伸びようとすることを生かすことのできる人にならなければならない。

編集後記

博報教育フォーラムはお蔭様で10回を迎えました。ひとえに、ご参加いただきました皆様のご支援の賜物と感謝申し上げます。

節目となります今回のテーマ設定にあたり、「海外からの視点を借り、日本の学校や教育を振り返り、そこから日本の教育の本質を探ってみたい」と考えました。教育の現場に直接携わっていると、問題や課題はすぐに目についても、よいところには気がつかないことが多いのではないでしょうか。そこで、海外の視点を借りて日本を見ることで、見落としてしまいがちな「日本の教育の誇れる点」を探りたいと思います。海外と対比することで、日本の教育・学校・教師の強みを理解し、改めて海外からのヒントも活かされてきます。

国内外の教育に精通した専門家による多様な事例紹介を導入に、会場の皆様が直接議論するグループセッションでは、「日本の教育・教師の強み」について改めて振り返っていただき、各グループから様々なキーワードが挙がりました。パネリストの先生方からも「生徒の全人格形成に責任を持つ教師」「学びと共生の場としての学校」、そこで行われる「共感力を育む教育」などが挙げられていました。

今回、普段は見落としがちな「日本の教育の強み」を再確認することで、日々の実践の中に、自信や誇りを持てることがあるということに気づくことができました。

日本の教育に誇りを持ち、その上で海外との違いも認めながら「日本の教育の本質とは何か」について考えていただくヒントにしていただきたいという想いを込めて、このレポートをお届けします。

発行/ 公益財団法人 博報児童教育振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂2-11-7 ATT新館8階　TEL.03-5570-5008 FAX.03-5570-5016
URL www.hakuhodo.co.jp/foundation/

Waterless Printing. Naturally.
PRINTED WITH SOY INK
ENERGY GREEN
この印刷には環境に配慮した「水なし印刷」と「大豆油インキ」を採用しています。また消費電力の一部はCO2を排出しないグリーン電力を使用しています。